

幼稚園の年中クラスにおける初日の英語授業

—英語は幼児にどのように指導され、幼児は英語をどのように習得していくか—

The first English class for four-year-old children at a kindergarten

—How English is taught and how children acquire English—

瀧 沢 広 人

Hiroto TAKIZAWA

1 はじめに

小学校就学前の子どもの教育・保育の場には、「幼稚園」「認定こども園」「保育所」の3つがある。認定こども園は、2006（平成18年）に「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」によりその制度がスタートした。内閣府（2019）によると、認定こども園の数は年々増加している（平成23年：762園，平成31年：7208園）。

就学前の子どもの教育・保育には、幼稚園には「幼稚園教育要領」、保育所には「保育所保育指針」、認定こども園には「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、がそれぞれあり、それらの教育要領等に基づき、教育及び保育が行われる。

幼稚園教育要領では、教育の領域を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つに分け、教育が行われる。しかしながら、その5つの領域には、外国語教育についての記載はない。

保育所保育指針では、保育を「乳児保育」「1歳以上3歳未満児」「3歳以上」の3つの括りでねらいや内容を示している。現行の保育所保育指針では、同じ年代の子どもを育てるという観点から、幼稚園教育と保育所における保育内容は整合性が図られ、乳児保育を除く1歳以上の保育については、幼稚園の領域と同様、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域が設けられ、内容も類似している。しかしながら、外国語教育についての記載は見当たらない。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領は、幼稚園教育要領及び保育所保育指針との内容に整合性をもたせものとなっており、教育・保育内容は類似している。ここにおいても、外国語教育についての記載はない。

このように、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において、外国語教育についての記載がないにも関わらず、幼稚園・保育所・認定こども園では、英語教育が行われている。

ベネッセ教育総合研究所（2019）は、国公立幼稚園、私立幼稚園、公営保育所、私営保育所について、英語活動の実施状況の調査を行っている（表1）。回答園は4,565園（所）であり、有効回答率は28.5%である。これによると、英語学習を行っている幼稚園、保育所は、2012年度の調査と比較しても、確実に増えている実態がある（認定こども園については、2019年度調査のみ）。また、ベネッセ教育総合研究所は、私立幼稚園を対象に、年齢別の実施状況を調査している。それによると、3歳児では61.9%、4歳児では81.9%、5歳児では97.3%が実施している結果となっており、5歳児での97.3%ということ、ほとんどの園で英語活動を実施していることになる。

以上のように、教育要領等では、外国語教育への言及がないにも関わらず、国公立幼稚園では、その4分の1が、私立幼稚園においては約5分の3が何らかの形で英語活動を行っている実態が明らかとなっている。

表1 幼稚園等における「英語活動」の実施率 * () 内は、2012年度との比較増減

	2012年調査	2018年調査
国公立幼稚園	17.1%	26.1% (+ 9.0)
私立幼稚園	58.0%	62.4% (+ 4.4)
公営保育所	10.7%	16.1% (+ 5.4)
私営保育所	33.8%	44.4% (+10.6)
公営認定保育園		42.6%
私営認定保育園		66.4%

そこで、本研究では、幼稚園における英語教育がどのように行われ、それが言語習得の筋道からどのような関連があるのかを導き出すことを目的とし研究を行う。

2 言葉の習得

2.1 母語の習得

「ヒトは『ことば』をどのように習得していくのだろうか」については、長年の研究により、多くの研究成果が生まれ、言葉の獲得についての知見は確実に深まってきている。

子どもの言語獲得については、多少の個人差はあるものの、概ね満一歳の誕生日を迎える前後には、意味のあることば（初語）を発し始め（今井・針生 2012 : 16, 伊藤 1990 : 24, 鈴木・白畑 2012 : 16 他）、2歳では、「パパ カイシャ」「ママ イナイ」のような助詞を抜いた2語文を話すようになる（中野 2010 : 73, 岡田 1990 : 14）。1歳半頃の語彙数が50語を越えるあたりから、子どもの語彙獲得の様相は一変し（ウイリアム 2008 : 9, 成田 2018 : 48, 鈴木・白畑 2012 : 18）、語彙爆発と呼ばれる現象が見られる。また、今井・針生（2014）は、子どもはたった1度、その語が使われただけで、次からは自分で正しくその語を使っていくことができるようになるという。また、最初の1年間は発話もしなかった子どもが、その後、爆発的に語彙を獲得していく過程には、生まれてから1年の間に、母語の音声を聞き、その特徴を分析し、一連の文の中から、「指示対象（＝単語）の切り出し」を行い、「切り出した単語」の意味を推論しながら、次々と新しい語彙を身に付けていく（同 : 16-19）。

正高（1993）も、乳児について、実は言葉を聞いているだけでなく、乳児のうちから、自らも声を発し、自発的にコミュニケーションを図ろうとしているという（同 : 16-26）。乳児の言語音創出の過程では、泣き声以外に初めて言語らしい音（正確には意味不明な音）が聞かれるのは、生後2～3か月頃と言われる。「アー」「クー」のような声を発するクーイング（cooing）である。その後、生後6か月になると、子音と母音の結合の反復ができるようになり、「papa（パパ）」「mama（ママ）」「baba（ババ）」のような「反復喃語」を発するようになる。反復喃語は、最初に、p,b,mの両唇で調音される音の次に、舌尖でのt,d,n、が使えるようになり、その後、舌背でのk,g,yの順というように、調音しやすい音から発声を覚える（伊藤 1990 : 17）。この時期には、まだ言語を発生する器官が十分育っていないため、発声できる音が限られる。正高（1993）も、乳児は、生後8か月頃に、ハイハイから、つかまり立ちを覚え、姿勢の変化に伴い肺活量が増し、声の高さや、長さを自在に操れるようになるという、食べ物も離乳が進み、固形物を食べるにつれ、顎や歯、歯茎が発育し、言語音の基礎が確立され、多様な音が発することができていくという（同 : 127）。つまり乳児は、何かを伝えたいという意思は潜在的には持っているものの、それを言葉で伝える発声器官が育っていないために、「クーイング」や「喃語」という形での発声が起こると考えられる。

このように、人が言語を獲得していく道筋は明らかになってきた背景には、多くの研究成果の積み重ねがある。チョムスキーやクラッシュェンが主張した「言語獲得は生得的なもの」という言語獲得のメカニズムに加え、認知心理学・認知科学が明らかにしている。

2.2 言語の臨界期

母語の獲得においては、障がいがなく、適切な環境（十分なインプット）が与えられれば、どの子も言語を獲得できるということは、誰もが疑うことはない。逆に言えば、適切な時期に、適切な獲得が行われることがなければ、その後の言語獲得に困難、もしくは不可能を示す。いわゆる「言語の臨界期」である。実際、言語の臨界期については、レネバークを始め、ニューポートらの研究で、母語獲得において確認されている。そこから外国語も早く始めなければ習得できないと考える人もいる。

しかし、第二言語の習得については、実際の所、臨界期の存在は確認されていない。確かに、ニューポートらの研究では、より低年齢でアメリカに移住した人の方が、ネイティブに近い英語力を示した結果を報告している（今井 2012 : 122, 鈴木・白畑 2012 : 195, 他）。ニューポートらの研究では、3歳～7歳の間に移住した人は、ネイティブと変わらない文法能力を身に付けているが、移住時期の年齢が高い人の文法能力はネイティブのものと比較し、差が大きいという結果が出ている。そのような幾多の説により、第二言語習得にも臨界期があるとし、「外国語学習は早く始めた方がいい」という考えに至る。しかしながら、前述した通り、第二言語習得については、言語習得の臨界期は確認されておらず、大学生になってから外国語を勉強し、ネイティブと変わらない語学力を身に付けたという反証も複数報告されている。筆者は後者の立場をとる。

3 幼児英語教育における先行研究

3.1 幼稚園・保育園における「英語活動実践」について

幼稚園や保育園における英語活動について、研究実践・調査研究が行われている。アレン・上野(2000)は、幼稚園において週1回20分程度の英語指導を「言語的アプローチ」「テクニク（授業活動）」「カリキュラム」の3点で整理している。言語的アプローチでは、指導法を Language-based Approach と Activity-based Approach に分け、それぞれの長所や短所をあげながら、幼稚園では Activity-based Approach に基づいた活動として、年長児及び年中児における英語活動カリキュラムを紹介している。テクニク（授業活動）では、Mother Goose Songs や Total Physical Response、Storytelling を取り上げ、それら教材の扱いと、指導法について言及している。

五十嵐・甘糟(2014)は、保育園での英語活動の実践を通じ、子どもの意欲を高める英語活動について発表している。週1回30分の英語活動を私立保育園で合計12回授業を行い、英語活動で用いた教材は、①絵本、②フラッシュカード、③歌、④手人形・ぬいぐるみ・聴診器 等である。指導内容は、①挨拶、②自分の名前、③数字、④数の数え方、⑤年齢、⑥いくつ？、⑦感情や気持ち、⑧野菜の単語、⑨アルファベット、⑩曜日、⑪色、⑫I like~, ⑬天気 等である。五十嵐らは、「ミッキーマウスなどのキャラクターを使用することは、英語活動だけでなく、保育においても子どもの興味や関心を引き付けることができるため、有効な教材の一つである（同：283）」と言い、キャラクターの指人形等を使用する際は、役になりきり演じることの大切さを指摘している。また、数字を数える時には、ただ単に数字を言っていくだけでなく、例えば英語教師と保育者が交互に風船を叩き、キャッチボールを行いながら、数を数える方法をとっている。このことで、「何もない状態で数を数えるより、風船などを利用して英語で数を数えることは、英語で数字を覚える楽しさに繋がる（同：284）」とその効果に言及している。さらに「子どもに英語を流暢に話させようと言うことではなく、英語活動は子ども達が『楽しかった、英語の世界は自分たちの国と違うみたいだ、英語以外にも、違う言語の世界がある、そこはどのようなところなんだろう』と好奇心を持つことを大切にしながら、異文化理解に視点を置いた英語活動を展開していたと言える（同：289）」と興味・関心を大事にしている。

3.2 英語学習の実施状況について

幼稚園における英語活動の実施についても調査が行われている。池中(2006)は、石川県内の67の幼稚園にアンケートを依頼し41園から回答を得、30園(73.2%)が英語学習を行っているという。英語学習の対象は、年長児のみでの実施が7園(23.3%)、年中児以上が11園(36.7%)、年少児以上は12園(40.0%)であった。池中は、回収できていない園を考慮に入れても、英語学習の実施率は高く、その1つの要因として、金沢市が小中英語一貫教育特区になったことが英語学習への意識を高めているという。また、池中は、青森県の実施状況も紹介しており、青森県の2003年当時の実施率が、市部で54%、郡部で55%であると記述している。

秀ら(2013)は、幼稚園・保育所14カ所を対象に実施状況の調査を行っている。それによると、14のすべての園や所で英語活動は行われており、実施回数は、月2回及び週1回が5園、週5回、週2回、月1回がそれぞれ1園ずつである。

糸山(2017)は、教員免許状更新講習に参加した10名に対して、勤務園において英語指導のプログラムが導入されているか調査している。その結果、英語指導を行っている園は、8園(80%)であった。実施回数については、週1回が7園(87.5%)、月1回が1園であった。また、対象園児は、年長・年中は全ての園で行っており、年少から実施していると答えた園は3園(37.5%)であった。

4 研究の目的

本研究の目的は、幼稚園児が英語をどのように習得していくかを明らかにしていくことにある。

ヒトが母語(第一言語)を学ぶ過程と、人が母語を身に付けた後の第二言語を学ぶ過程では、そもそも母語が獲得されているという状況下であるので、自ずと学びの様相が違ってくるはずである。ヒトが母語を身に付ける時は、言語の何もかもが分からない状況でゼロから言語を獲得していく。

しかし、第二言語習得の場合、第一言語である母語の獲得が前提となり、第二言語習得は、そこからスタートすることができる。例えば、ウサギだったら、「ほら、耳が長くて跳ねる動物」「目が赤くて」「エンジンが好き」などの言葉で説明できる。しかし、もし母語習得の過程で、ウサギを説明するとしたら、まず「耳」が何であるか、そもそもわかっていなくてははいけない。「耳」という語彙が理解できていることが前提で、先ほどの説明が可能となる。よって、第二言語を習得する際、第一言語の知識や技能を、知らず知らずのうちに利用していることが考えられる。

そこで、日本語という母語も完全には獲得しきれていない幼児が、英語という第二言語をどのように理解し、習得していくかを実際の授業から様子や場面を切り取り、子どもの認知を考察してみたいと考えた。リサーチ・クエスチョンは以下の2つである。

RQ1: 英語を初めて学ぶ園児に対して、教師はどのようなアプローチで指導しているか。

RQ2: 園児は第二言語をどのように切り取り、習得につなげようとしているか。

RQ1では、指導者側の立場に立って、考察を試みる。園児の多くは、母語の基礎ができつつあり、母語の獲得ではなく、第二言語を習得するという視点でみたとき、指導者は、英語をどのようなアプローチで指導しようとしているのか。また、どのような方策で新しい言語理解を試みようとしているのか、等を、授業記録に考察を加え、授業で扱われているアプローチを整理していく。

RQ2では、園児側の立場に立ち、考察を試みる。ヒトが母語を獲得する際、まず文の中から単語の区切れ目を探し出し、単語を取り出す作業を行う(今井・針生, 2014)。では、それと同じように、第二言語習得の際も、1文の中からある種の単語を抜き出し、その単語に意味付けを行い、新しい語彙を身に付けていく過程を辿るのであろうか。とするならば、園児の頭の中で、指導者の英語を聞きながら、単語を抜き出す作業がどこかで行われているのではないかと考える。そこで、授業記録から、園児が第二言語の中からどのように単語を切り出し、意味付けをしていくのか過程を探る。

5 研究の方法

5.1 参加者及び指導体制

岐阜市の私立幼稚園、年中クラス（4歳児）が本研究の対象者である。園での英語学習は、年中（4歳児）から始まり、年長（5歳児）と、園児は2年間、英語学習に取り組む。遊びを通して英語の音や外国の言葉、外国の文化に触れたりすることで、興味・関心が持てるよう環境づくりを行っている。

指導者は、英語ネイティブの外国人（T1）と、英語ネイティブの外国人（T2）とのチーム・ティーチングが行われている。さらに、日本人保育者（HRT）の2名が加わり、計4名で英語活動を行っている。英語活動の時間は30分間であり、授業は週1回である。

5.2 研究の手順

次のような手順で調査研究を進めた。

- ・年中クラス（4歳児）の英語活動の初日の授業をビデオで録画する。また、授業を参観しながら、気付いたことを、メモをする。
- ・授業を文字起こしする。文字起こしをしたテキストの右に「授業中の注目すべき教師の教授行為」「教授行為を説明する概念」「授業中の注目すべき幼児の発話」「幼児の発話を説明する概念」「テーマ、構成概念等」等、授業パーツ毎に、気づきや考察等を記入していく。

なお、授業は、2019（令和元）年5月15日に行われた。年中クラス（4歳児）は、この日が英語活動の初日であった。授業内容は、①学習ルール ②英語の歌 ③数字と天候 ④気分 ⑤色 ⑥食べ物 ⑦Good Bye Songである。次節では、特徴的な場面を取り上げ、授業の記述及び解説を行う。

6 英語活動 初日の授業（令和元年5月15日：年中（4歳児）クラス）

6.1 学習ルール その1 Class --- Yes

授業冒頭、教師がHello.と言いながら手を振ると、園児もHello.と言う。その後、すぐに、T2の先生に向かってT1がClass.と言う。それに答えるかのように、T2の先生がYes.と言う。同様に、HRT1に向かってClass.と言うと、HRT1はYes.と答える。HRT2に対してはClass. Class.と2度言うと、HRT2はYes. Yes.と2回、答えている。この間、園児は黙って様子を見ていた。「何が起きているのだろう」という感じであった。

T1: Hello. (手を振りながら)

C: Hello.

T1: (T2の先生に向かって) Class.

T2: Ye...s.

T1: (HRT1の先生に向かって) Class.

HRT1: Ye~s. 先生と同じくらいのお声のパワーで言うの。

T1: (HRT2の先生に向かって) Class, Class.

HRT2: Yes. Yes.

T1: Oh, you can do it. That's a high power, everybody. Shu! (Scoreboardに✓を入れる)

実はこれは、Whole Brain Teaching（以下WBT）の手法を用いている。WBTは、子どもを授業に集中させるための工夫を取り入れたアメリカで1999年に開発されたものである。教師が、Class.と言うと、園児が、Yes.と返答することで、園児を教師側に視線を向けることをねらいとする。

筆者は録画したビデオを何度も見ながら、ここでのやりとりが、何を目的に行っているのか、しばらくわからずにいたが、この手法がWBTによるものであると、かなり時間が経ってから理解した。

いよいよ園児の番である。

T1: Can you do it? Can you do it? I can do it. That's fine. Class.

C: Yes~~.

T1: Oh, you can do it. You can do it. Shu. (Scoreboard に✓を入れる)

Class: Oh, yeah.

T1 が、Scoreboard に「Shu. (シュッ)」と言いながら、✓を入れている。これも WBT の手法によるもので、園児の元々持つ能力で評価するのではなく、子どもの取組や努力、姿勢を評価する考え方 (rewards students for improvement, not ability) であり、黒板に貼られた Scoreboard には、よい行いであった場合の称賛の印として、目に見える形で、園児にフィードバックしているのである。

6.2 学習ルール その2 Criss Cross --- Applesauce

2 つ目の学習ルールは、「座り方」である。T1 が Criss Cross. と言うと、T2 が Applesauce. と言う腰を下ろす。この Criss Cross とは、足を十字に組むことから、胡坐をかくという意味である。アメリカの子育てやプリスクール等での着座の指導として、よく使用されている。それを英語授業初日に指導している。

T1: Next. It's Criss cross ... applesauce. (ゆっくり言う)

○○ sensei will help me, OK? Criss Cross.

T2: Applesauce. (T2 が座って胡坐をかき、手は組む)

T1: Oh, that's perfect. That's a high power. Shu. (Scoreboard に✓を入れる)

T2: Oh, yeah.

T1: You can do it. You can do it. (ちゃんと座れている子を指さして言う)

Oh, oh, you can do it too. You can do it. You can do it.

T1: Can you do it? Stand up. (児童は立つ)

That was quick like a cheetah. (チーターの写真を見せる) Shu. (Scoreboard に✓を入れる)

Class: Oh, yeah.

T1: OK. OK. Let's try Applesauce.... Criss Cross.

C: Applesauce. (児童は座る)

T1: OK. Quick like a cheetah.

C1: cheetah (1人が cheetah と言うと周りでも真似をして言い出す園児がいる)

6.3 英語の歌

Hello Song を歌う。この歌には、clap your hands/ stretch up high/ touch toes/ turn around/ stomp your feet という動作英語が使われている。園児は、教師の動作を見ながら真似しながら体を動かし、最後には元気よく手を高く上げ、Hello. Hello. と声を出し、歌っていた。

6.4 「数字 (1~10)」と「天気」の言い方

数字は、ロケットがだんだんと飛び立っていく様子を用いながら導入している。One から順に数を言っていくが、最初、腰を下ろしていた園児が、だんだん立ち上がるのを見て、Down, down, down. と、T1 が座るようにジェスチャーで示す。すると園児は腰を下ろす。

T1: Rocket. Rocket. Rocket.

(と言い、両手を組んで頭の上に置き、ロケットの形を作る。園児にも同じ姿勢を取らせる)

T1&Class: One, two, three, four....

T1: We're going to (立ち上がる園児を見て) Down, down, down. (園児は座る)
We're going to count to ten. Ten.

Class: One, two, three, four, five, six, seven, eight nine.... Ten. (一斉に飛び上がる)

その後、すぐに天気の子の歌に入った。

T1: ♪ What's the weather like today? like today. like today?

♪ What's the weather like today? Today is....

T2: (雨降りのイラストを見せる)

C: (園児は無言)

HRT1: Rainy?

T1: Rainy? (外を見ながら) No. No. No. Change. Change.

T2: Change? (雨のイラストから、曇りのイラストに変える)

T1: ♪ Today is...cloudy?

C1: Yes.

HRT: No. No. No.

T1: ♪ Today is sunny.

HRT1: Yeah!

T1: ♪ Today is sunny. Criss Cross.

HRT1: Applesauce. (児童は座る)

T1: That was quick like a cheetah. Shu. (Scoreboard に✓をつける)

C: Oh, Yeah!

6.5 「気分」や「性格」の言い方

語彙は、happy, mad, hungry, kind の4つである。イラストという視覚情報に加え、教師も表情を変えながら、ニコニコした表情で happy と言ったり、怒った表情で mad と言ったり、お腹をさすり hungry と言ったりしている。その中で kind については形容しがたく、次のような場面を作っている。

T1: (わざと物を落とす)

C1: (女の子が拾って先生に渡す)

T1: Thank you. Thank you. That's very kind. Thank you very much.

I'm thirsty. I'm very thirsty.

T2: Here you are. (と言って飲み物を渡すふり)

T1: Oh, thank you. That's kind. Thank you.

T2: You are welcome.

T1: I can be kind. (と言って尋ねる)

HRT1: 優しい人?

T1: I can be kind. ♪ I can be kind. You can be kind. Let's be kind.

教師がわざと紙を落とし、近くの女の子が紙を拾って渡し、That's kind.と言っている。ここでは、You're kind.という言い方はせず、That's kind.と言っている。女の子が紙を拾ってくれている場面、そのことが優しい行為ということで表現しているのだろうか。That's...を用いている。

6.6 「色」の言い方

あらかじめ、色カード（赤、オレンジ、黄色、緑、青、紫、茶色）を壁に貼っておく。

T1: I see colors. How many? Let's count. One, two, three, four, five, six, seven. How many?

C: Seven.

T1: What color? What color is it?

HRT:分かる人？

C: (先生が指す色カードを順番に言っていく) Red. Orange. Yellow. Green. Blue. むらさき

T1: purple and...

C: (茶色が言えない)

T1: brown. O.K. I'm gonna dance.

園児は、最初、Red. Orange. Yellow. Green. Blue. と元気よく言っていたが、「紫色」のところで、園児の1人が「むらさき」と言った。また、次の「茶色」も園児からは英語が出てこなかった。

6.7 「果物・野菜」の言い方

最後の学習は、「食べ物」である。場面設定としては、Dolly (ぬいぐるみ) が友達を連れてくるが、その友達は、なんとなく不機嫌である。なぜならお腹をすかしているからである。そこで、Dolly の友達が食べたがっている果物や野菜のところに連れていく。ヒントは、Dolly の友達が印刷されている紙の「色」である。その色と同じ色の果物や野菜を、Dolly の友達は食べたいと思っている。

T1: Dolly-chan is happy. She has a friend.

C1: Happy.

T1: Yes. Dolly-chan's friend. Dolly-chan's friend is happy? (ドリーの友達の絵を見せる)

Happy? Happy friend?

HRT:ちょっと教えて。

C: No.

T1: Mad. Mad. He is mad because he is hungry. Where's the food?

C: food?

HRT: 探して、Food どこ？

T1: food. Food. Hungry, Tomato. No. Blueberry. (黄色い食べ物を探しに行く)

6.8 Good Bye Song

約30分の授業時間も終了近く、最後は、Good Bye Song を歌って終了となった。

7 考察

7.1 教師の指導アプローチからの考察

RQ1は「英語を初めて学ぶ園児に対して、教師はどのようなアプローチで指導しているか」であった。教師側からのアプローチで、特徴的なものを4点あげる。1つは「外国語を教える際、そこに場面やストーリーを作り、使用言語のもつメッセージを伝える形で言語指導していること」である。単なる言語を単体で教えるのではなく、そこに場面を作り出して、メッセージを伝えることを優先して言語を導入していることが活動の随所に見られた。2つ目は「言語にメロディーを載せ、歌を多用している」ことである。メロディーは頭に残りやすい。本稿では詳細に提示できなかったが、Hello Song.

/ What's the weather like? / How are you? / Color song / Good Bye Song.の5つの歌が用いられていた。3つ目は「学習ルールの徹底」である。学習指導以前に聞く姿勢は大切である。園児の集団を集中させるための手立てとして、クラスルールを最初に指導していた。4つ目は「語彙や表現を活動を通じてスパイラルに扱っている」ことである。30分間という短い授業時間ではあったが、活動と活動の間に学習した語彙を繰り返し、意図的に扱っている様子が見られた。

7.2 園児の学びからの考察

7.2.1 メッセージの理解

RQ2は、「園児は第二言語をどのように切り取り、習得につなげようとしているか」であった。授業記録をとりながら見えてきたことの1つに、「メッセージの授受」がある。6.4において、園児が1から10まで数字を言っていく際、腰を下ろしていた園児が、ロケットが発射するかのように、徐々に立ち上がってしまうことがあった。それを見たT1は、ジェスチャー付きでDown, down, down.と言った。おそらく園児は、Down, down, down.という「音声」を聞いて腰を下ろしたのではなく、T1の「ジェスチャー」によるものであると推測する。つまり、言語からの理解でなく、メッセージの理解だと推測する。また、6.7では、T1がDolly-chan's friend is happy? Happy? Happy friend? という場面で、HRT1が、「ちょっと教えて」と言うのと、「happy じゃないよ」と言う意味でNo.と言っている。これは、尋ねられてたメッセージに対して、英語で応答している。メッセージのやり取りが正常に行われていることを示す。逆にメッセージの授受がうまく成立しない場面もあった。6.4の後半の天候についてのやり取りで、天気は晴れなのに、Today is cloudy?と聞かれ、Yes.と言った子がいた。この場合、メッセージの授受が正確に行われていない。言語理解がなされていないと推察する。このように幼児の言語習得過程において、幼児は言語よりも、メッセージを受け取ろうとしているのではないか。言語を学ぶという意識はないだろう。メッセージ授受は、言語理解よりも優先する。

7.2.2 指示対象の切り出し

母語獲得において、乳児は一連の文の中から、指示対象（単語）の切り出しを行っていることは、2.1で述べた通りである。本研究の目的の1つである「第二言語習得の際も、1文の中からある種の単語を抜き出し、その単語に意味付けを行い、新しい語彙を身に付けていく過程を辿るのであろうか」、つまり、「単語の切り出し」が行われているかどうかを探ることであった。

最初に「指示対象の切り出し」が確認されたのは、6.2の場面である。T1が、Quick like a cheetah.と言った後に、cheetahと園児が復唱した。これはcheetahと言う語を、教師が言った文の中から、切り出していることになる。乳児が母語を獲得するときと同じように、単語を切り出しているのである。また、6.7の場面では、T1がDolly-chan is happy. She has a friend.と言うと園児がHappy.と言っている。これも「単語の切り出し」である。しかし、興味深いのは、教師の直前の発話でない1つ前の発話の中からhappyという語を取り出しているのである。このように、英語授業の初日とはいえ、園児は教師の発言の中から単語を取り出すことができていることがわかった。

7.2.3 語の意味の理解

授業の中で、指示対象を、母語を介さずに、第一言語と同じような環境で、英語の意味を理解させようとしている場面があった。6.5である。教師がわざと紙を落とし、それを拾ってくれた子に対して、That's kind. (これがkindということだよ)と言っている。しかし、その言語使用の場面・状況から、「拾ってくれてありがとう」とも受け取れる。また、拾ってくれた紙を見て、「それは私のです」と言っているのかも知れない。「いい子ね」と誉めているのかも知れない。happyとmadについては、イラストや実際の教師たちの表情から意味理解は容易であったと考えるが、hungryやkindなどは、母語を使わずに英語だけで意味理解させるとしたら難しい。例えば、hungryでお腹をさすっている場面を見て、お腹がすいているとも言えるが、見方によっては、お腹が痛いとも捉えられる。実際に筆者の娘に、お腹をさすって、「どういう意味?」と尋ねると、「お腹がいっぱい」と返ってきた。そ

こで、お腹が痛いという設定で、顔をしかめたら、「お腹が痛い」とイメージ通りの返答が返ってきた。これを数回繰り返したが、お腹がすいているというメッセージは伝わらなかった。このように、第二言語を習得する場合、指示対象の切り出しをした後に、幼児は、どのようにその語に意味づけをしていくのかは、大変興味深い。

8 本研究の成果

本研究の主題は、幼児は英語をどのように習得していくかを明らかにしていくであった。幼児への授業観察を通じ、初回の授業であっても、園児は文の中から指示対象を切り出すことができるということが確認できたことは大きな成果である。また、園児は、言語理解よりも「メッセージの授受に重きを置いている」ということも特徴的な姿として確認された。このことにより、幼児は言葉をメッセージの手段として扱っていることがわかった。大人は言語そのものを学ぶが、幼児は英語を介して、英語使用者の意図・メッセージを受け取ろうとしている姿が確認できた。

9 おわりに

今回の研究において、園児は、第二言語を学ぶ際も「指示対象の切り出し」を行っていることがわかった。そこで、幼児における英語学習の様子を継続調査するとともに、今回の研究成果に加え、園児は、いつ頃、どのように、1 語文から 2 語文への創出が行われるようになるのか、その創出の過程を観察していき、母語獲得との場合と比較検討を試みたい。幸い手元には、その後の 6 回回の録画ビデオがある。幼児の第二言語習得の過程について、様々な先行研究と照らし合わせながら、幼児の言語習得の過程の整理・分析を行い、幼児の第二言語習得過程のモデルを提案していきたい。

<参考文献>

- アレン玉井光江・上野めぐみ (2000) . 「幼児英語教育について」『文京女子大学研究紀要』第 2 巻 第 1 号 177-193
- ベネッセ教育総合研究所 (2019) . 「第 3 回 幼児教育・保育についての基本調査」
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5444> (令和 2 年 12 月 10 日アクセス)
- 五十嵐淳子・甘糟節子 (2014) . 「保育現場による英語活動の取り組みー保育園での実践を通してー」『共栄大学研究論集：共大研究 (12)』273-292
- 池中雅美 (2006) 「石川県内の幼稚園における英語活動の現状と英語活動の位置づけに関する一考察」『北陸学院短期大学紀要』第 38 巻, 257-266
- 今井むつみ・野島久雄・岡田浩之 (2012) . 『新 人が学ぶということ 認知学習論からの視点』東京：北樹出版
- 今井むつみ・針生悦子 (2014) . 『言葉をおぼえるしくみ 母語から外国語まで』東京：ちくま学芸文庫
- 伊藤克敏 (1990) . 『こどものことば 習得と創造』東京：勁草書房
- 糸山昌己 (2017) . 「次期学習指導要領に見える幼児英語教育」『東京成徳短期大学 紀要』第 51 号
- 厚生労働省 (2018) . 『保育所保育指針解説』
- 正高信男 (1993) . 『0 歳児がことばを獲得するとき 行動学からのアプローチ』東京：中公新書
- 内閣府 (2019) . 「認定子ども園に関する状況について (平成 31 年 4 月 1 日現在)」
https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kodomoen_jokyo.pdf (令和 2 年 12 月 10 日アクセス)
- 中野由美子 (2010) . 「第 4 章 前言語期のコミュニケーションの発達」『新・保育内容シリーズ 言葉』東京：一藝社
- 成田朋子編著 (2018) . 『新・保育実践を支える 言葉』東京：福村出版
- 岡田明編・岡田明・岡崎比佐子・加藤清子・古宇田亮順・相馬和子・永野泉・中村美津子 (1990) . 『新 保育内容シリーズ [改訂] 子どもと言葉』東京：萌文書林
- 秀 真一郎・他 (2013) . 「幼児教育現場における英語活動の実態と方向性」『吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系)』第 23 号, 21-28
- 鈴木孝明・白畑知彦 (2012) . 『ことばの習得 母語獲得と第二言語習得』東京：くろしお出版
- ウィリアム・オグレイディ著・内田聖二監訳 (2008) . 『子どもとことばの出会い 言語獲得入門』東京：研究社